ISSN 1346-2601 (Print)
ISSN 2436-5408 (Online) 2024 年 12 月 25 日公開

『南都記雅眤』について
――現存 6 種の書誌と名所記としての位置づけ

安宅　望（立命館大学文学研究科）
E-mail　gr0465vr@ed.ritsumei.ac.jp

要旨

『南都記雅眤』は寛文 4 年（1664）頃に書かれた最初の奈良の名所記である。京都で出版された名所記『京童』の評判にヒントを得て、奈良在住の知識人が書いたと思われる。出版はされずオリジナルも失われており、現在、写本が 6 種類残されている。本稿では、『南都記雅眤』写本のそれぞれの書誌を記し、相互の関連性を考察した。特徴的な言説を抄出し検討した上で、改めて小型案内記の原点として位置づけた。先行研究の無かった同書を、奈良地域研究の新資料として紹介する。

abstract

The “Nanto Ki Osanamutsubi” is the first book of famous Nara landmark written around the 4th year of the Kanbun Era (1664). The book was probably written by an intellectual living in Nara, who was inspired by the reputation of a famous book published in Kyoto, “Kyo Warabe”. The manuscript was never published, and the original has been lost; six manuscripts now remain. This article describes the bibliography of each of the manuscripts of the “Nanto Ki Osanamutsubi” and discusses their interrelationships. I extracted and reviewed the characteristic discourses, and once again positioned it as the origin of the small guidebooks. There had been no previous research on this book, and it will be introduced as a new resource for research on the Nara region.

1.　はじめに　小型案内記の系譜

筆者は以前、「近世奈良における小型案内記　系譜化の試み」[1]と題して、17 世紀の終わりから出版されてきた名所案内記を紹介し、最終的に『改正絵入南都名所記』に収斂されていくその過程を具体的に示し系譜図にまとめた。その系譜において、明暦 4 年（1658）に中川喜雲によって書かれた仮名草子・地誌である『京童』を、小型案内記の原点に置き、その影響下で執筆されたと序にある『南都名所記』[2]を奈良における小型案内記の嚆矢と位置付けた。

その写本の底本が、奈良における最も早い名所案内記であるという筆者の考えは変わらないが、その後調べていくうちに、この国会図書館にある『南都名所記』と題された写本の他に、5 か所に『南都記雅眤』という書名で、同内容の写本があることが判明した。この書名の読み方であるが、序文に「京わらへと名付たる双紙有、是も其わらむへにひとしき類なれはおさなむつひとやいはん」（傍線筆者）とあるので、「なんときおさなむつび」と読ませるのであろう。だが、「雅」の字に「おさない」「若い」という意味は無いので、本当は「稚」ではなかったか、と考えている。いずれの写本も「雅眤」となっているので、オリジナルにそのように書かれていたと判断せざるを得ない。『京童』は賢い少年に案内させて京を見物する、という趣向で京の名所を紹介していくが、『南都記雅眤』はそのような趣向は取らなかった。奈良の名所を興福寺・春日社・東大寺・その他という順番で、和歌や説話を交えて紹介していくものである。享保 15 年（1730）に写されたと奥書にある国会図書館本『南都名所記』は、現存する 6 種類の写本の内、おそらく最も時代の下るものであることがわかった。

筆者は、『南都記雅眤』の写本のコピーを入手し、またそれぞれの所蔵館を訪問し写本の調査を行った。改めて『南都記雅眤』を熟読し、どのような本であるかを考え、それぞれの写本の特徴を調べ、相互の関係性を探ってみた。そうした上で、再度この書物を小型案内記の系譜の中で、もう少し詳しく位置付けてみたいと思うに至った。なお、この写本に言及した論文等は、管見の限り見当たらない。先行研究においても、この本は見落とされている可能性が高い。

6 種類の写本とは以下の通りである。順不同で書名と所蔵館を記す。

① 『南都名所記』 国会図書館（以下『国会図書館本』と表記）[3)]
② 『南都記雅眤』 宮内庁書陵部（同『書陵部本』）[4)]
③ 『南都記雅眤』 西尾市岩瀬文庫（同『岩瀬文庫本』）[5)]
④ 『南都記雅眤』 京都大学図書館（同『京大本』）[6)]
⑤ 『南都記雅眤』 名古屋市蓬左文庫（同『蓬左文庫本』）[7)]
⑥ 『南都記雅眤』 早稲田大学図書館（同『早大本』）[8)]

2-1. 『南都記雅眤』、6 写本の書誌

2-1-1 『国会図書館本』

外題は『南都名所記』で表紙左上に墨書で書かれる。内題は無い。原本を調査すると冊子自体はかなり疲れが見え、小さな虫損の穴が無数にある。虫損により文字の判読が難しい箇所もある。また表紙左半分は水をくぐったようなシミがあり汚れている。料紙は楮紙である。寸法は縦 24.0cm、横 16.9 ㎝、丁数は表紙を除き 38 丁である。本文は 9 行書きだが、一部 10 行、11 行の丁もある。見返しの裏に旧所蔵者である高木利太の朱書きの書き込みがある（図 1）。序文第 1 丁オには蔵書印が三か所押されている。右上に「高木家蔵」の角印、中央上に「国立図書館蔵」の角印、中央下に日付印の丸印。日付印は「昭和二十三年」と辛うじて読める。国会図書館の台帳によると昭和 23 年 3 月 18 日に受け入れたことになっている。見返しの高木の書き込みは、写本についての重要な情報が含まれている。

本書享保十五年ノ写本ナレド原本ノ記文ハ寛文七年也永禄年間ニ炎上シタル大仏殿今ハ礎石ノアトバカリニテ取立ツル人モナシトアリ本書ノ著者ハ奈良ノ人ナルベシ

大正十五年六月五日　高木利太

本書ノ序文ニ洛陽ノ名所旧跡ヲカキ集テ京童ト名付タル双紙アリ是モ其童ニヒトシキカナレバ幼ムツヒトヤ云ハントアリ故ニ題号ヲ南都幼ナムツヒト称スベキナラン奈良ノ名所記トシテハ延宝年間ノ南都名所集奈良八重桜ヨリ以前ノモノナリ書中春日祭礼ノ行列次第稍（ママ）シク記セリ

本文では経過年数を数えるときの基準をすべて寛文 7 年（1667）としている。このことにより本文の執筆は寛文 7 年以後数年の間と考えられる。巻末に「享保十五年庚戌歳　三月十八日　三宅貫勝写」とあり、写本の制作は享保 15 年（1730）である。三宅貫勝という人物については不詳である。

2-1-2 『書陵部本』

外題は『南都記雅眤　全』 書き簽である。内題は南都記雅眤である。書写年時を示すものは書かれていない。表紙裏に「上田氏」の文字がある。また裏表紙の裏にも持主　上田氏」の書き込みがある。序の丁にある蔵書印は「諸陵寮図書記」と「宮内庁図書印」である。表紙は茶色でかなり古く四辺がかすれている。料紙は楮である。寸法は縦 27.7cm、横 19.4cm、丁数は表紙を除き 54 丁である。序文9行、本文9行で統一されている。

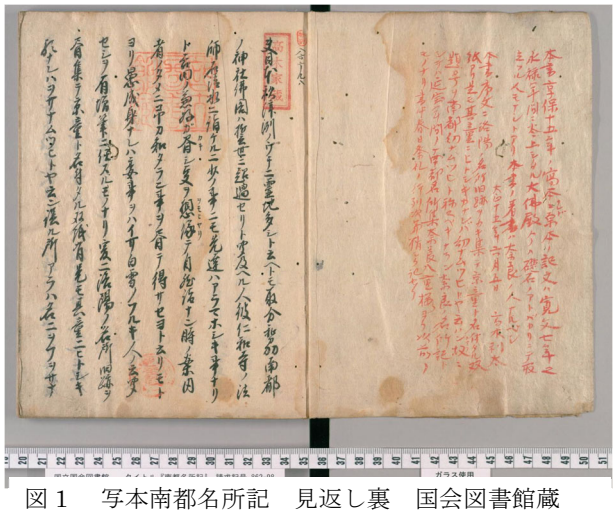


図 1　写本南都名所記　見返し裏　国会図書館蔵

原本の保存状態はあまり良いとは言えない。裏表紙上方に大きな虫損があり、本の内部にかなり食い込んでいるが、幸いなことに字を損なうことはほとんど無く、読むことに支障は無い。最初の4丁とその後も所々袋綴じの折り目が破れて開いている。

この本は、経過年数の基準を寛文 4 年（1664）としている。寛文 4 年は、6 種の写本に書かれた年紀の中で最も古いもので、『南都記雅眤』のオリジナルは寛文 4 年に書かれたと考えられる。この『書陵部本』は、一筆で書かれており、他の写本と比べて書写上の瑕疵が最も少なく、読みやすい上手な字で書かれている。筆者はオリジナルに最も近い本であると考えている。その点については、後節で詳説する。

2-1-3 『岩瀬文庫本』

外題は『南都記雅眤』 書き簽で、本の中央に貼られている。内題も南都記雅眤である。書写年時を示すものは書かれていない。虫損は少なく、保存状態は良好である。蔵書印は、序の丁に「岩瀬文庫」の角印がある。表紙は薄縹色の型押布目紙で、料紙は楮である。寸法は、縦 31.0cm、横 23.5cmで、他の写本に比べて一回り大きい。序文 10 行、本文 10 行で、丁数は表紙を除き 52 丁である。行書風の流麗な筆致で書かれており、一筆である。

この写本も、経過年数の基準は寛文 4 年となっている。その意味ではオリジナルに近い本ではある。ただ、それでも底本を写したもの、と考えられるのは、終わりに近い五劫院の項だけ 11 行で書かれている。よく見ると 10 行書いたあとで、1 行を飛ばしてしまったことに気

づき、最後に1行をやや狭い字で入れている。また、綴じ代をとるように書写しておらず、左右の空白が同じ幅になっている。そのため右綴じにしたときに右側にフリガナを振ることができず、左側にフリガナを付けているところが数か所ある。

冊子の状態は、それほど古びた印象は無いが、岩瀬文庫の目録詳細では「近世前期写(寛永～元禄)」としている。

2-1-4『京大本』

外題は『南都記雅眤』 表紙に直書である。内題も南都記雅眤だが、「雅眤」の字を小さく書いている。書写年時を示す記述は無い。保存状態は悪く、汚れ、疲れ、虫損が多い、しかし幸いなことに読むことは妨げない。表紙は無地で汚れが目立つ。料紙は楮で仮綴じである。寸法は縦 26.2 ㎝、横 18.5 ㎝である。丁数は表紙を除き 62 丁である。序文 8 行、本文 8 行で統一されている。

菊亭文庫所蔵本ということで、蔵書印は序の丁に「今出河蔵書」の角印がある。京都大学図書館のデータベースには、『南都記』と登録され、著者名を雅眤としている。しかし、他館の所蔵本から考えても、雅眤は書名の一部と見るのが妥当である。

すべて一筆で清書してあり、丁寧な書写で読みやすい。ただ、書写の不備が目立つ。1行飛ばして写しているところ、脱字が複数個所ある。また明らかな誤字に対して「本ノママ」あるいは「如本」と註を入れている。

この本も経過年数の基準を寛文 4 年に置いている。冊子の古さや美しい丁寧な字からみて、『南都記雅眤』のオリジナルか、オリジナルに近いものか、と思ったが、読み進めていくと上記のような書写ミスがあり、写本であることは間違いない。行数は異なるが 1 行の字数が『書陵部本』とほぼ同じのせいか、行の頭が『書陵部本』と揃うところが多々あり、『書陵部本』を写したか、『書陵部本』と同じ底本を写したか、と思わせる。

2-1-5『蓬左文庫本』

外題は『南都記雅眤　全』である。書き簽で中央に貼られている。内題は南都記雅眤である。書写年時は、巻末に「享保二年丁酉　正月日」と明示されている。この本は書写者の跋があり、そこに書写した所以が書かれている。

今度興福寺大伽藍焼亡ニ付不
慮に此書をもとめ得て不取敢瀉
之夫本書は寛文四年たりしを
此年までの年数をはかり今焼
失をも加写之もの也
享保二年丁酉年正月日

とある。興福寺大伽藍焼亡とは、享保 2 年(1717)正月4日に講堂から出火して中金堂、南大門、西金堂、南円堂など多くの堂宇を焼いた火事のことである。書写者は興福寺炎上の知らせを聞き、すぐさま『南都記雅眤』の底本を入手して写したのである。その際に、底本は経過年数の基準を寛文 4 年に置いているが、それを享保 2 年に置き換え、年数も数え直している。そして、興福寺の項に享保 2 年の災厄を書き足している。書写者の氏名等が記されていないのは残念である。

表紙は、金茶横刷毛目で、料紙は鳥の子である。しっかりした装丁で、保存状態も良好である。表紙を除いて 52 丁で、序 10 行、本文 10 行、跋は 6 行である。蓬左文庫に古くからあった本のようで、蔵書印は序の丁に「尾府内庫図書」と「蓬左文庫」の角印がある。

上記の事情で急遽写本に取り掛かった、ということなのか、一筆ではなく何人かで手分けして書写しているようである。序文は行書風で書き、本文は楷書で書かれたかと思うと、途中で行書風になり、項目は楷書だが、本文は行書というように混交する。また、底本には無い文章も挿入されていて、他の写本とは一線を画する。挿入されている文については、後の節で述べる。

2-1-6『早大本』

この本は相当傷んでいて、虫損穴も多い。そこですべての丁が裏打ちされ、新しい表紙が前後に付き、四ツ目に綴じ直してある。この補修によって、現在はしっかりとした本になっているが、本文は所々虫損により読みにくい。外題は「雅眤」とのみ無地の表紙に直接書かれている。書写年紀や書写者、来歴等を示す記載は無い。蔵書印は序の丁に角印の「早稲田文庫」・「千厓文庫」[9]の 2 つが押されている。

寸法は縦 31.1 ㎝、横 23.8 ㎝で『岩瀬文庫本』とほぼ同じ大きさである。後補の表紙を除いて 43 丁で、序 10 行、本文 10 行だが、序文の後に丁を改めず 1 行空けて、本文を書き始めている。このような体裁は『早大本』だけである。一筆で書かれ、誤字・脱字が数か所ある。また、フリガナが一切付いていない。本文の最後に、興福寺の塔頭が 94 院、東大寺の塔頭が 34 院列挙されており、それぞれ「(興福寺)右知行惣高壱万五千三拾三石九斗也」、「(東大寺)右知行高弐千弐百拾壱石四斗五合」と書かれている。これは『早大本』にのみ見られる付録記事である。

この本も経過年数の基準を寛文 4 年に置いている。虫損がひどく、古色蒼然とした本である。しかし、本文を精査すると、文を飛ばして写して意味が通らなくなっているところが複数個所あり、やはり、何らかの底本を写した写本と判断できる。

2-2. 底本についての考察

以上、6 種類の写本の書誌を記した。この節では、さらにそれぞれの写本の内容上の特徴を述べながら、写本の底本について考える。

書写年がはっきり明示されているのは、『国会図書館本』享保 15 年、『蓬左文庫本』享保 2 年である。そ

表１　『南都記雅眤』異同表

	① 国会図書館本	② 書陵部本	③ 岩瀬文庫本	④ 京大本	⑤ 蓬左文庫本	⑥ 早大本
書写年紀	享保15年	不明	不明	不明	享保2年	不明
年紀の基準年	寛文7年	寛文4年	寛文4年	寛文4年	享保2年	寛文4年
治暦3年からの経過年数	○601年（寛文7）	○598年（寛文4）	×518年（寛文4）	○598年（寛文4）	○651年（享保2）	○598年（寛文4）
東金堂釈迦如来の脇侍	弥勒　虚空蔵	弥勒　虚空蔵	観音　虚空蔵	弥勒　虚空蔵	弥勒　空	弥勒　虚空蔵
興福寺六祖※1	心叔シンジヤク	心叔シンエイ	信叡シンエイ	心叔シンエイ	心叔カイ	心叔
行列の次第２番	馬乗紙手笠	馬に乗歩手笠※2	馬乗帋手笠	馬乗歩手笠	馬乗帋手笠	馬に乗紙手笠
吉城川4行目	同	全ク	仝ク	全ク	仝	同
紀伊御社新薬師寺	記載なし	鐘明神	鐘ノ明神	鏡ノ明神	鏡ノ明神	鏡の明神
五ヶ屋村上天皇	2首	2首	3首	2首	2首	2首
水屋社雨ごい	世界	世界	世界	世男※3	世界	世界
真言院	常は	常は	常は	常は	堂は	つねは
真言院	言談口説	言談日説※4	言談口説	言談問説	言談口説	言談口説
新禅院	紺紙金字	紺紙金字※5	紺帋金字	餌紙金字※5	紺紙金字	餌紙金字※5
般若寺	毎三月廿五日	毎三月廿五日	毎年三月廿五日	毎三月廿五日	毎三月十五日	毎三月廿五日

※1興福寺HPでは神叡、※2書陵部本は「歩」に読めるが汚れあり曖昧、※3京大本には「本ノマヽ」と註あり
※4書陵部本は「日」に「ク」とフリガナをふる　※5「餌」とも読める字、京大本・早大本は完全に「餌」

の他の本は、書写年代は不明ながら比較的状態の良い『岩瀬文庫本』と、虫損や疲れが目立つ『書陵部本』と『京大本』、『早大本』となる。『国会図書館本』は、経過年数の基準を寛文 7 年に置いている底本を書写していることが明らかなので、オリジナルの寛文 4 年頃に書かれた本を寛文 7 年頃に書写した別の本があることがわかる。

『蓬左文庫本』に押された「尾府内庫図書」の長方形蔵書印は、藩内の御側御文庫蔵本を表す [10]。写本自体も立派なものなので、その取扱いは軽いものでは無かったはずである。つまり、書写する行為も単なる趣味の範疇で行ったのではなく、そこにある種の目的を以て書写したと考えられる。享保 2 年正月 4 日の火事の報を受けて、その月の内に底本を入手し、手分けして書写して御側御文庫に納めたのである。書写した人物も藩の御小納戸役周辺に勤務していた人達であると思われる。どのように底本を入手したのかは、書かれていないが、藩の上層部では、『南都記雅眤』という本の存在と情報が共有され、書写するに足る本であると認識されていたことは確かである。また興味深いのは、底本に無い情報を書き足していることである。興福寺の炎上について、追加情報として 4 丁目に以下の文がある。

享保二丁年酉正月四日之夜戌
之刻従講堂火上而諸堂焼失ス　同日
於講堂五大力之札行之仍而此態カト
疑之　享保元丙申年十二月廿七日之
夜天火子之時ト云リ以節考ニ山地剝
䷖　之六四剝状以膚凶変卦火地晋　䷢　之九四
晋如鼫貞膚変而火上之象也一一不遑略之

この文の解釈は難しい。易の観点から興福寺炎上を理屈付けようとしている [11]。また、東大寺大仏殿の項において底本では、永禄 10 年の戦により大仏殿が炎上し、その後に建てた仮の大仏殿も現在では朽ち果ててしまった、と書かれているが、それに続く文章を新たに付け加えている。

是は寛文の頃のことの葉にして其後龍松院といゑる僧かゝる霊場のあれはつる事をかなしみ諸国を勧進し二たひ興行を企てりよつて造立宝永六年己丑三月四月貴供養有云中門は去年立受納す印いとまなし大講堂も炎失してこれはいまたたゝす

寛文 4 年当時は、いまだ大仏・大仏殿再興の機は熟しておらず、露座のままであった。貞享元年（1684）から公慶上人の大仏・大仏殿再興の勧進が始まったのである。宝永 6 年（1709）の 3 月から 4 月にかけて大仏殿落慶法要が行われた。そのことを書き足している。

当時の尾張藩界隈で、『南都記雅眤』のオリジナルか、それに近い本を所有している人がいて、それを借り受けて写し、経過年数の基準を享保 2 年に更新して、さらに新情報を付け加えて、『南都記雅眤』を新しい別の本に仕立て上げ、藩の文庫に納めたのである。

『京大本』は、蔵書印から菊亭文庫 [12]の蔵本であることがわかる。菊亭文庫とは、清華家のひとつで西園寺実兼の四男兼季を遠祖とする菊亭家相伝の文書・典籍の文庫である。今出川殿に棲んでいたため、今出川氏を名乗る。蔵書印に「今出河蔵書」とあるのはそのためである。邸内に多く菊を栽培していたことから、菊亭と呼ばれ、明治になり名字とした。文庫は現在、京都大学図書館と専修大学図書館に架蔵されている。専修大学図書館に江戸時代後半期に作られた所謂『蔵書目録』が 2 種類 [13]あるが、その目録に『南都記雅眤』は掲載されていない。ただ、『蔵書目録』の内、時代の下る方の目録は、未装の巻子本であり、一部散逸している可能性がある。また目録所収の本が有職故実関

連の書籍に偏っていることから、全ての蔵書を記載したわけでも無いようだ。『京大本』は、書写年や書写者が不記載なので来歴は不明であるが、古色蒼然としており、オリジナルに近い時代に写されたものと考えられる。しかも、清華家の文庫にある、ということは、底本は京都の上流貴族にも知られていたものと考えられる。ただ、前述したように、『京大本』にのみ見られる誤字が散見される。水屋社の項の 16 行目で「世界」を「世男」と写し、「本ノママ」と注記している。また、二月堂の項の 14 行目、「牛王をたもてる人」とあるところは「牛王をたりてる人」とも読め、そこに「如本」と注記がある。さらに、新禅院の項の 2 行目、「紺紙金字」とあるところを「餌紙金字」と写し、6 行目、「わかねをいそぐ」とあるところを「別をいそぐ」と写している。真言院の項の 17 行目、「言談口説皆是真言」とあるところ、「言談問説皆是真言」とある。以上の部分は『京大本』にのみある異同で、単なる写し間違いとも考えられるが、そのように書かれた底本があった可能性も捨てきれない。いずれにしても『南都記雅眠』という本が、尾張藩の武家社会に加え、京都の公家社会でも写本をつくるべきという一定の評価を受けていたことは、注目すべき事実である。

その事実を更に補強するのは、『書陵部本』の存在である。『書陵部本』の蔵書印は「諸陵寮図書記」、「宮内省図書印」[14]が上下に押されている。写本の出どころは残念ながら不明[15]であるが、蔵書印から見て古くから宮内省内にあったものと考えてよいだろう。となると、『書陵部本』はもちろん、その底本も京の公家社会、或いは知識人層に受け入れられていたことの証拠になる。前述したように、『書陵部本』と『京大本』は、詳細に比べると同じ底本を写したか、『京大本』は『書陵部本』を写したのではないか、と考えられる部分がいくつかある。「異同表」(表 1)から抄出すると、興福寺南円堂の項、興福寺六祖の 3 人目は両書のみ「心叔(シンエイ)」とある。また、吉城川の項では、本来「仝く」とあるべきところ、両書のみ「全く」と書かれている。新禅院の項で本来「紺紙金字」とあるべきところ、『京大本』は「餌紙金字」と書かれている。『書陵部本』も同所の「紺」が「餌」に見えなくもない字で書かれている。さらに行列の次第の項の七番で『書陵部本』の 4 行目、「的七番の時は児七騎なり児一騎つゝに扈従一」という文が、『京大本』では抜けて、3 行目から 5 行目に飛んで、意味がつながらない文になっている。同じように若宮御殿の項で丁の変わり目の行の「心をたかく持なす藤は盛にして英たれり」を、『京大本』は飛ばして写している。『書陵部本』の1行分を『京大本』がそのまま抜かして写しているところが、『書陵部本』を底本として『京大本』が成立したと思わせる所以である。しかし、確実な証拠はなく、京都の公家社会を含む知識人層に知られた『南都記雅眠』が、複数回写本されたこと、オリジナルに近い底本が存在した、という事実を確認するに留めたい。

図 2　聆涛閣集古帖 調度 1 より「村上天皇御扇」
国立歴史民俗博物館蔵

『岩瀬文庫本』は、他の写本に無い特徴を持っていて、これまで述べたものと違う底本の存在を示唆している。「異同表」を見ると、興福寺の項において、康平 3 年(1060)の諸堂焼失から 8 年目の治暦 3 年(1067)に、再建供養が行われたという記述の中で、治暦 3 年から寛文 4 年(1664)までの年数を、『岩瀬文庫本』のみ 518 年と間違えて記述している。また、興福寺東金堂の釈迦如来像の脇侍を、やはり『岩瀬文庫本』のみが「観音虚空蔵也」としている。他の写本は「弥勒虚空蔵」である。前述した興福寺六祖の 3 人目は『岩瀬文庫本』のみ「信叡(シンエイ)」となっている。さらに、五ヶ屋の項の 10 行目、「村上天皇より松室の仲算へ下されし扇、此扇に勅筆の哥有」ということで、

きみか代は天の羽衣まれにきて
　　なつともつきぬ巌ならなん
君か代はしら玉椿八千代とん
　　なにかいのらんかきりなけれは
をのつからわか身さへこそいのらるれ
　　きみか千年にあはんとおもへは

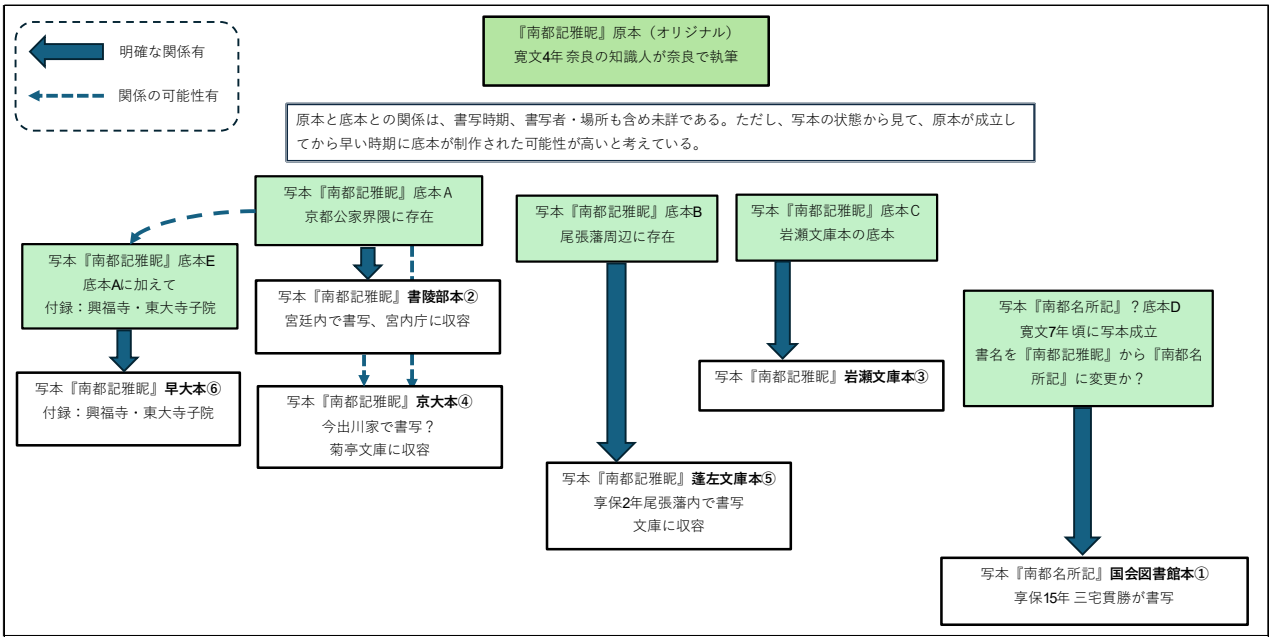
以上の 3 首が載っている。国立民族学博物館所蔵の『聆涛閣集古帖』[16](図 2)によると、その「調度」1 の中に「村上天皇御扇　和歌三種宸筆　賜山階寺松室仲算」と書いた扇の絵がある。この扇に書かれた和歌三首は上記の和歌である。『岩瀬文庫本』と『聆涛閣集古帖』とが一致するので、『岩瀬文庫本』の底本の筆者は、実物の扇を見たと考えられる。この 3 首を載せているのは『岩瀬文庫本』だけで、他の写本は下記の 2 首である。

君が代は天の羽衣まれにきて
　　なつともつきぬ巌なるなん
白玉はおのれが色はそれながら
　　紅葉におけば紅の露

「君が代は」の歌は同じであるが、「白玉は」は『岩瀬文庫本』の歌とは違う。ちなみに『大和名所図会』(寛政 3 年、1791 刊)には、この 2 首が載せられている[17]。

このように、『岩瀬文庫本』の底本は、他の写本とは別系統であったと考えられる。しかし、『岩瀬文庫本』は来歴を類推できる手がかりが全く無い。岩瀬文庫の

表2　『南都記雅眠』底本と写本の系譜



創始者岩瀬弥助が、明治時代後期に全国の書店、古書店から集めた本の内のひとつなので、その出どころを確認することは極めて難しい。

『早大本』は、傷みがひどく、本自体も古いので、早い時期の写本と思われる。前半の興福寺・春日社に関する記述で行を飛ばして抜けている文章が多々みられる。特に目立つ写し間違いは北円堂・南円堂の項で、「北円堂」とあるべきところを「南円堂」と項を建てて、文は北円堂の文を書き始めるが、3 行目から南円堂の本文にすり替わってしまい、『書陵部本』で言えば 5 行分が抜けてしまっている。当然文章全体の意味が通らないものになっている。

所々抜けている文は約 15～20 字ほどで、これは『書陵部本』などの1行の字数に相当する。想像をたくましくすれば、『早大本』の底本は『書陵部本』系統の大きさも同じもので、1 行の字数は最大 20 字強であった。『早大本』の書写者は、それを大判の冊子に 1 行 25 字前後で写していった。そのため1行飛ばした時に、その字数が 20 字前後抜けているのである。また、誤字脱字も散見される。加えて手間を惜しんだのかフリガナが一切ない。手蹟の丁寧さも比べると他の写本より一段劣ると言わざるを得ない。この本は誰かに読ませる為に写されたのではなく、写本の為の写本であったようだ。「異同表」から見ても、この本の底本は『書陵部』系の本文に加えて、巻末に興福寺・東大寺の塔頭を記した本、ということになるだろうか。

以上、それぞれの写本の底本について検討し、何種類かの底本の存在が明らかになった。以下に箇条書きでまとめてみる。

① 現存の写本にはオリジナルと明言できるものは無く、すべて底本を写したものであること。
② 『国会図書館本』の底本となった経過年数の基準を寛文 7 年に置き換えた写本があること。
③ 尾張藩周辺の武家社会に知られていた底本があり、享保 2 年に『蓬左文庫本』となったこと。
④ 京の公家社会で知られていた底本があり、寛文 4 年以降に『書陵部本』、或いは『京大本』となったこと。
⑤ 『京大本』は『書陵部本』を底本とした可能性があること。
⑥ 上記とは別の底本があり、それが写されて『岩瀬文庫本』となったこと。
⑦ 『早大本』の底本は『書陵部』系の本文に、興福寺・東大寺の塔頭が列挙されているものであること。
⑧ 以上、オリジナルを含めると最低でも 6 種類の『南都記雅眠』が寛文 4 年から享保年間にかけて主に武家・公家といった知識階級に流通していたこと。

全体を（表 2）にまとめた。

『南都記雅眠』は、地誌や名所記が流行する前の時代に、奈良の本格的な名所紹介の書として、上流社会の中で一定の評判をとっていた珍しい書であると言えるだろう。次節では、その内容について概観する。

3. 『南都記雅眠』の内容について

この節では、『南都記雅眠』の内容について特徴的と考えられるいくつかの点について検討する。奈良の名所記の嚆矢として、その構成や特徴を抽出して、それが発展的に小型案内記や名所記につながっていく萌芽を持っていたことを明らかにしたい。6 つの写本は前述のようにそれぞれ特徴があり、どの本が最もオリジナルに近いか判断は難しい。しかし、内容については基本的に同じであり、異同は誤差の範囲のものである。書誌的には問題があったとしても、文意を損なうほどの差は無い。そこで、筆者が

それぞれを読み、最もオリジナルに近いと判断した『書陵部本』の本文に着目して内容を見ていく。

『南都記雅眤』(書陵部本)の本文を精査すると、興福寺・春日社・東大寺の三か所の名所を中心に記述し、巻末近くに空海寺、五劫院、般若寺、祇園社、雲居坂、轟橋、奈良町の項が追加されている。寺社は東大寺の北方面にある東大寺所縁のものである。雲居坂は奈良八景の第6、轟橋は同じく第5として紹介されている。また、春日大社大鳥居の項の中に、春日若宮御祭礼の「行列の次第」が詳細に記載される。これは「行列の次第」の全貌を記述した最も早いものである[18]。以上を踏まえ、後の名所記(含む小型案内記)の先駆けになる構成の特徴をまとめる。

① 南都の名所を興福寺・春日社・東大寺の3つに絞った最も古い名所記であり、1冊にまとめられている[19]。
② 同時期に書かれた奈良の地誌『南北二京霊地集』(万治2年1659)、『和州寺社記』(寛文6年1666)はともに神社仏閣を網羅的に紹介するだけであったが、それに限らず春日野・若草山といった自然の名所も併せて紹介している。
③ 最初に項目を記しその後に本文を書くこと、「〇〇から寛文四年まで〇〇〇年」というように経過年数を記述すること、名所にちなんだ古歌・俳句を挿入すること、など後の名所記の基本の形を示している。
④ 全て一筆書きになるような道筋で名所を紹介している訳ではないが、それぞれ回る順序を多少意識した配列で名所を紹介している。

これら構成の面から見た特徴は、後の地誌・名所記の成立に影響を与えたと考えられる。いずれも明確な関係性を証することは出来ないが、①の奈良町の狭い範囲を扱った趣向は『奈良名所八重桜』(延宝6年刊)と同工である。『南都名所道筋記』を始祖とする小型案内記『南都名所記』、『改正絵入南都名所記』も、その範囲は『南都記雅眤』とほぼ重なる。②③の名所案内の方法は、それ以後に現れた名所記や地誌にもれなく取り入れられた[20]。④の道順を意識した名所の配列は、『南都記雅眤』ではまだ発展途上である。奈良巡りの道筋は『南都名所道筋記』(貞享元年刊)によって確立される。以上のように、『南都記雅眤』の方法は、後の名所記や小型案内記に踏襲されている。

次に、書かれた言説の特徴について、いくつか取り上げたい。最もティピカルなものとして、東大寺大仏殿の項にある永禄10年(1567)の炎上事件についての記述を挙げる。

> 永禄十年十月十日に又炎上す。其子細を尋るに和州信貴山の城主松永弾正平蜘の釜といふを持給ふ。彼ひらくもの釜といふはひら蛛を鋳付たるか湯の沸(タキル)にしたかひ釜の上をはいまはる名誉の釜なり。信長公是を聞給ひて再三所望有けれとも同心なし。其遺恨によつて合戦数度にをよふ(後略)

永禄10年の炎上の原因を松永弾正所持の平蜘蛛の釜に求めたのは、他の地誌・名所記には見られない『南都記雅眤』独自の言説である。しかし、松永久秀が織田信長に臣従したのは永禄11年以降であり、三好三人衆との戦によって大仏殿が炎上した事件は、信長との関係が原因では無い。だが、100年ほど前の事件である大仏殿炎上と平蜘蛛の釜とを結びつけた言説が、この当時の奈良で語られていたことは大変興味深い。『南都記雅眤』の著者が、かなり教養の高い知識階級に属する人であることは、経典を引用した文[21]が本文に散見されることからも容易に想定できる。また高木利太も推測したように奈良に住んでいたことも間違いない[22]。その筆者が、平蜘蛛の釜が大仏殿炎上のきっかけとなったという言説を信じていた、ということは、この言説は大仏殿復興前の奈良の住民にまことしやかに語られたものであったのだろう[23]。

さらに読み進めると、意外な事実に気づく。『南都記雅眤』は、奈良の伝説に等しい古い言説を数多く記述しているが、一方で近い時代の出来事も積極的に取り上げているのである。大仏殿炎上と平蜘蛛の釜の因縁もそのひとつである。左府の森の項に、豊臣秀長の代官であった井上源吾が、家来を使って町内の石塔を集めて石垣を造ろうと、中将姫の父である横萩右大臣豊成公の石塔を押し取ろうとした、という話が出ている。

> 其時彼坊に連歌師廬中斎心前住居しけるか罷出てこれはかく由緒ある石塔なれはたやすくをしとらるへきやうやはといひけり。侍のいはく御辺は聞ゆる連哥師なれは此石に付連哥し給へ其句によりて此石をとるましきといひけり。心前取あへす発句しけり。此しも秋の事にや有けむ
>
> 引のこす秋もはなさく石竹
>
> 夫歌道には鬼神をもやはらけあらきものゝふの心をもなくさむるといひけんも実理りなるかな。かくおそろしき武士なれとも此発句の心を感し彼石を引のこしけるこそやさしけれ

という話である。連歌師廬中斎心前の即興の発句によって豊成公の石碑を守った、というささやかだが奈良らしい伝説を紹介している。また、西金堂の項には、

> 此堂の南の方なる壁にさはひこといふ大文字有、近当彼堂の壁を塗なをしけるに彼大文字塗残されたり子細有にこそ

「さはひこ」という落書きが、壁を塗り直す修理の時にもそこだけ残して塗り直された、いかなる理由があるのだろう、という話である。いずれも後の名所記には無い話で、江戸初期の一時期に奈良町界隈で話題になったが、後に忘れられた話なのだろう。

また、当時は盛んであったが、今は廃れたものとして、二月堂の鬼子母神の千団子というものがある。

> 二月堂　鬼子母神をいはへり。さるによつて柘榴を御愛木とする也。近年此所に千団子といふ

事初る。子をもたさる人団子を千作りて彼宮に備へたてまつれはかならす子をまうくとなり。

千団子というのは、三井寺や東京雑司ヶ谷の鬼子母神では、現在でも名物となっている[24]。一方、二月堂鬼子母神への千団子供養はいつのまにか廃れて、今は行われていない。また、土産物にもなっていないようだ。さらに、新禅院の項では著者が登場しているかのような文言がある。

新禅院　此寺も寛永年中の類火に焼失して今又あたらしく作られけれとも以前には似さりけり。

この文では、『南都記雅眠』の著者は焼失前の新禅院を見たことがあるかのように書いている。奈良に住む著者は、同時代の奈良の変化も書いておく、という視点を持っていたのである。

『南都記雅眠』の最後の項は奈良町の項として、以下の文が続く。

奈良町　いにしへの奈良のみやことはいへと今も所繁昌して売買の屋形の前には金銀のあつかひ広く家々竈には旦夕の煙厚し。人の心すなほにして賢をまなへり天地おたやかに国土安穏なるもひとへに大明神の御恵ふかきゆへなり。あふきてもあふへき奈良の宮寺なるへし。

奈良町のにぎやかなことを慶び、それは（春日）大明神の恵み深き故、と考えている。奈良町がさらに繁華に活発に躍動するのは、大仏・大仏殿が再興する時であるが、そのひと世代前においても郷土愛にあふれた文言でこの本を結んでいる。

4. むすび

この『南都記雅眠』を通読して感じるのは、徹頭徹尾「内側」の視点から書かれていることである。奈良の住民であること、奈良の風景を愛で、繁栄を喜ぶ、という立場を明確に示している。『南都記雅眠』には、古歌や言説の引用元が一切書かれていないが、これだけの書物を著わすには多くの古書・文献を参照したに違いない。しかし、典拠を示して、これだけの言説を集めました、という『和州旧跡幽考』のような衒学的な要素はほとんど見えない。加えて、市井の噂や評判、自分が見聞したことなどを積極的に書き入れている。名所案内記というものがまだ現れていない時代に、自らの教養と興趣にまかせて自由闊達に郷土愛を吐露していると言ってよい。この自由闊達さが当時の教養人達の趣向に合致したのだろう、何種類もの写本が作成されたのである。現在でも6種類の写本が存在し、先に検討したようにそれぞれ別の底本の存在も想定できるのである。その伝播とインパクトは、意外にも奈良だけに留まる物ではなかった。

『京童』という京の名所記が、奈良で『南都記雅眠』を生み出し、その後20年ほどの間に奈良では名所記・地誌が出版された。ある地域でどれくらいの規模で地誌や名所記が出版されたかを探索し、奈良と比較してみることで、歴史的文化情報がどのように成立し広がっていったかを知るひとつのアプローチになるのではないかと考えている。これは今後の研究課題である[25]。

奈良における最初の小型案内記と言われる『南都名所道筋記』（貞享元年、1684）は、『南都記雅眠』から名所の選択、古歌、言説の多くを受け継ぎ、道筋が一筆書きになるように並べ直し、奈良を訪れる人々の歩き方を示したのである。『南都名所道筋記』の著者は不明であるが、奈良在住の知識人が書いたものと思われる。『南都記雅眠』の写本の広がりを考えると、その著者が、道筋を整えて奈良の言説を再編集しようと意図した時に、その下敷きに置いたのが『南都記雅眠』であった蓋然性は決して低くないと考えている。

［注］

1) 「近世奈良における小型案内記 系譜化の試み」（『アート・リサーチ』21、2021、3月）pp.5-17
2) 国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2540217/1/1 書名は『南都名所記』だが、『南都記雅眠』とほぼ同文の写本である
3) 請求番号 862-98
4) 函号 165・406 https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100250815/ （urlの最終確認日は2024年10月8日である）
5) 函号 142-16 https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100132755/ （urlの最終確認日は2024年10月8日である）
6) 菊ナ 15 https://kuline.kulib.kyoto-u.ac.jp/opac/opac_detail_md/?reqCode=fromlist&lang=0&amode=MD10000&bibid=RB00028044&opkey=B171193191831872&start=21&listnum=29&place=&totalnum=31&list_disp=20&list_sort=6&cmode=0&chk_st=20&check=00000000000 （urlの最終確認日は2024年10月8日である）
7) 請求番号 1-90 https://housa.city.nagoya.jp/system/search/search.cgi?action=detail_view&m_bibliography_class=1&m_shelf_mark=1&m_data_mark=90&m_subno=%20%20%20%20%20%20&m_subno2=%20%20%20%20%20%20&m_subno3=

（urlの最終確認日は2024年10月8日である）

8) 文庫24 A0944

9) 元早稲田大学教授・元図書館副館長加藤諄（1907-2002）の収集資料である。総数約4500点。金石文、 とくに仏足石・古鐘銘などについての研究資料、および国語学、書道史、仏教関係資料からなる。

10) 「尾府内庫図書」の蔵書印については『蓬左』第4号（1980、10月）に織茂三郎のコラムに解説がある。
https://housa.city.nagoya.jp/archive/pdf/housa004.pdf
（urlの最終確認日は2024年10月8日である）

11) 享保元年（1716）の12月27日の夜、子の刻（午前0時頃）に天火（怪しい火）が現れたこと、この時期が易でいう山地剝という危急存亡の凶事が迫っていた時で、その卦を変じても火地晋で、欲にかられて動き、不正や腐敗の渦中に置かれる時であったことから、炎上は免れなかった、と解釈しているようである。

12) 菊亭文庫の解説は以下のurlを参照した
https://rmda.kulib.kyoto-.ac.jp/collection/kikutei
（urlの最終確認日は2024年10月8日である）

13) 田中幸江「専修大学図書館蔵「菊亭文庫蔵書目録」解題ならびに翻刻」(1)（『専修国文』第76号、2005）
同「 専修大学図書館蔵「菊亭文庫蔵書目録」書名索引(稿)」(『専修国文』第80号、2007)

14) 図書寮叢刊『書陵部蔵書印譜』(明治書院、1996）の解説によると、「諸陵寮図書記」の印は明治19年（1886）の改組で諸陵寮が独立した時に出来た印で、その時に諸陵寮で管理されていた蔵書に押された。「宮内省図書印」は明治6年（1873）から図書寮で押された印 である。どちらが早く押されたかは判断がつかない。可能性としては、明治19年に諸陵寮が独立した時に宮内省図書寮から諸陵寮に移管され「諸陵寮図書記」が押されたか、昭和24年（1949）に諸陵寮と図書寮が合併して宮内庁書陵部となったときに「宮内省図書印」が押されたか、の2つが考えられる。

15) 宮内庁書陵部『和漢図書分類目録』 下（1953）1139頁下段　国会図書館デジタルコレクション177画面
https://dl.ndl.go.jp/pid/2984887/1/177
（urlの最終確認日は2024年10月8日である）

16) 『聆涛閣集古帖』とは摂津国菟原郡住吉村呉田（現在の兵庫県神戸市の東部）の江戸時代の豪商・吉田家により編纂された古器物類聚の模写図譜である。吉田家は豊かな財力を背景に、江戸時代の後期（18世紀後半）から明治初年（19世紀後半）にかけて、三代・約100年間にわたって、当時の学者や貴族たちとの交流を通じ、多くの古文書や古物を収集して、この『集古帖』を編集した。現在は国立民族学博物館が所蔵し、精細な画像が公開されている。図2で挙げた扇の絵は16画面目にある
https://khirin-.rekihaku.ac.jp/reitoukakushukocho/h-1660-38
（urlの最終確認日は2024年10月8日である）

17) 『大和名所図会』巻1の本談義屋の項に記事有。「此扇は村上帝応和三年清涼殿にて法華講あり。南都北嶺の名徳二十五人五日十座の論議ありしに、仲算已講言葉の花あさやかに義の実を顕しければ帝叡感のあまりに賜はりし扇也。宸筆の哥あり」として2首書かれている。

18) 「行列の次第」は延宝6年（1678）で版行された『奈良名所八重桜』第6巻に挿絵入りで描かれる。また享保15年（1730）に版行された『春日若宮御祭礼図』下巻にも挿絵入りで詳しく描かれる。

19) 『南都記雅眤』書陵部本の丁数は 54 丁である。後に出た『南都名所集』は挿絵も含むが、春日社・東大寺・興福寺関連の記事の合計丁数は約111丁で4冊、『奈良名所八重桜』では約141丁で10冊である。『南都記雅眤』は、おおよそ半分の丁数で1冊にまとめている。

20) 『南都記雅眤』は寺社の堂宇の項目に加えて、八重桜、猿沢池、衣掛柳、楊貴妃桜、左府の森、春日野、雪消沢、鹿道辻、吉城川、若草山、手向山、雲居坂、轟橋などの項目を立てている。これらは後の名所記や小型案内記にもれなく引き継がれ、紹介文が記載されている。また、春日若宮御祭の鳥居前の行列の次第が一番から十二番まで書かれるが、これについては註18）を参照。

21) 「五ケ屋」の項にある村上天皇宸筆の歌「白玉をのれかいろはそれなから紅葉にをけは紅いの露」について「是は偏計所執(ヘンケショシウ)の心をよみし哥也。偏計所執とは唯識論の文也。慈恵大僧正と松室の仲算　禁中にての法問仲算の依為勝也。其法問は円覚経曰衆生国土同一法性地獄

天宮皆為浄土有性非性斎成[1]仏道」と解説している。

22) 『国会図書館本』にある高木利太の書き込み（図 1）に奈良の住人であると推定している箇所がある。全体を通して読むと筆者の奈良への並々ならぬ思いが横溢しており、奈良の住人であることは素直に頷ける。

23) 『早大本』にのみ書かれた狂歌が「大仏殿」の項に挿入されている。「永禄の十の十月十日のよならの大仏やくる卯の刻」、というもので、当時の奈良の人々は十の連続に何か因縁を感じたのだろう。

24) 三井寺の護法善神堂で行われる千団子祭は、旧暦の 4 月 16 日（現在では 5 月 16〜18 日）に行なわれる法会の俗称である。鬼子母神に千個の団子を供え、小児の守護、除災、安産などを祈願する。東京雑司ヶ谷の鬼子母神では「おせんだんご」と称するだんごを境内で販売している。

25) 現在、構想しているのは鎌倉との比較である。鎌倉も江戸時代には江の島に近接したひとつの観光地として『鎌倉名所往来』、『鎌倉名所記』といった小型案内記や、『新編鎌倉志』8 巻といった地誌が出版されている。江戸から近く、名所・旧跡が狭い範囲に点在している鎌倉との比較は取り組みたい課題のひとつである。